イギリスの関連文献の考察による 日本の左手書字指導改善の可能性と課題

押木　秀樹 [i]　　市ノ瀬　有香 [ii]　　小林　比出代 [iii]

1.　はじめに

1.1　本研究の概要

文字を手書きする際やその学習において、左手書字と右手書字とでは異なる部分があると考えられる。しかし、日本では書字の学習内容や方法において右手を基本とすることがほとんどであり、左手書字者のための指導について十分な配慮がなされていないことが指摘されている。この問題に対し、書写教育研究において問題点の指摘や基礎研究はなされているものの、学習指導の内容や方法に関する著述は極めて少ない。一方イギリスでは、左手書字者のための書字指導に関する著述が複数刊行されている。

日本における左手書字者のための書字指導には、どのような改善すべき点があるか、その改善のためにどのような課題があり、課題解決のためにどのような「議論」や「研究」が必要であるかを明らかにしたいと考えた。その方法としてイギリスで出版された左手書字指導に関する文献を検討することで、日本における左手書字指導の改善と課題について考察することとした。

対象とする文献は、Jean Alston『Writing Left-handed』（1996）他計 4 冊とした。当該文献から、左手書字者に対し配慮すべき点や指導内容を抽出し、それを日本の書写教育で用いられる分類（「姿勢」「持ち方」等）による 15 の大分類と、「紙の傾き」「手の汚れ」等の 47 の小分類により把握した。続いて、次の検討をおこなった。まず対象文献に記される項目には、「利き手に関わらず配慮すべき項目」が含まれており、いったんこれらを選別した。次に、「単なる左右の対称性に起因する項目」（着座位置や採光等）を選び考察した。最後に、「文字体系や書字動作に起因する項目」（横画は左から右など）について考察した。

以上を踏まえ、イギリスの文献で示されている指導方法等の考察から、日本の左手書字指導の改善の可能性とそのための課題を明らかにするとともに、課題を解決するための議論や研究の必要性について述べる。

1.2　左手書字と書字学習における問題の指摘

小林（2006）[1] は、左手書字者が書字する手を変更することの問題点と配慮の不足を指摘している。本研究の時点では、左手書字の子供を無理に右手書字に変更する必要はない、という認識が多いと思われる [2]。一方、左手で書字することによって生じる不都合な事象およびその解消についての研究は十分ではない。特に、書写の学習内容や方法が、ほとんど右手書字者の視点であることなどの問題が指摘されている。

たとえば、なかの（2008）[3] は、「左手利きが社会のマイノリティであり、日本の文

字体系はマイノリティである左手書字者への配慮がされていない」ことを指摘している。これに対し松本（2012）[4]も、左手書字に対する書写指導について十分な研究成果がみられないとしている。さらに、2013年度の全国大学書写書道教育学会のシンポジウム[5]においても、「利き手問題については、（中略）学習者のための対応を研究し、教科書等でも積極的に対策していかなくてはならないだろう。」と指摘されている。

さらに左手書字者のための書字の指導については、教育現場でも困惑している実態があるとされており、その実態は塩苅（1997）[6]などに見ることができる。

1.3　先行研究の現状

書写教育における左手書字者への配慮の不足、また左手書字者のための指導上の知見の不足は明らかといえよう。これまでの研究成果を確認しておく。

言語学の立場から、前述のなかの（2008）[3]は尾崎（1977）[7]を引用しつつ、「文字という道具が右手専用に作られている」ことについて、言及している。左手書字に関する研究成果は、生理学ないしは心理学の分野および理学療法の分野にもあり、なかのと同様の指摘も見られる[1]。

先述の全国大学書写書道教育学会でのシンポジウムにおける指摘[5]の後、書写教育研究の分野でも左手書字に関する基礎研究が見られる。大西・押木（2015）[8]は、ストロークの方向と筆圧の関係、回転の動作と筆順の選択等から、左手での書字が右手での書字と異なる特徴を持つことについて明らかにした。この結果は、横画の角度及びストロークの方向、筆順などに配慮が必要である可能性を示唆している。さらに、押木・遠藤・平田（2020）[9]は、縦書き横書きそれぞれの空筆部の動作において、左手書字と右手書字とで差が生じることを述べている。また日本語教育の分野において、内山（2013）[10]による左手書字者のための筆順の提案を見ることができる。

杉﨑（2015）[11]は、左手書字者の筆記具の持ち方と書字について、順手・逆手などの特徴ごとに調査をおこなっている。その結果、人差し指上部の接触位置は利き手に関わらず重要であることと、薬指の接触など左手書字者に見られる持ち方の特徴を示した。この結果は、作業療法の領域における鈴木・元井・川間（2012）[12]による左手書字者の筆記具の持ち方の調査分析結果、特に手関節を巻き込む形に関する考察とともに、参考にすべきであると考える。なお、市ノ瀬・押木（2022）[13]の内容は、毛筆筆記具の持ち方などに言及した実践に近い研究であるが、硬筆による学習については言及されていない。

これらの成果からは、左手と右手という対称となる動作であることによって生じる差異と、字体・字形・筆順といった文字及び書字に関する決まりごととが関わっていると予想される。また筆記具の持ち方が重要な要素となる可能性がある。ただ、基礎研究はなされている一方、実践研究が少ないことが認識できる。

1.4　本研究の目的

日本において、左手書字者のための書字指導を改善するために、どのようなアプローチが可能であろうか。一つにはこれまで実践の場などにおいて、左手書字の児童・生

徒に対する指導が工夫されている可能性はあり、それらを収集・整理することがあり得る。二つ目として、これまでの基礎研究の成果を実践に生かしていくことがあり得る。一つ目のためには十分な指導の蓄積やそれに関連する文献が望まれるが、日本において十分でない場合、他の国における左手書字指導の実践を参考にすることがあり得る。本研究では参考にする国をイギリスとし、これまでの基礎研究の成果も含め考察したいと考えた。

イギリスで出版された左手書字に関する学習指導の内容や方法についての文献を検討し、イギリスの文字や書字動作等と日本のそれらとの差異を踏まえた上で、日本の左手書字指導の改善の可能性とそのための課題を明らかにするとともに、課題を解決するための議論や研究すべき点を明らかにすることを目的とする。

1.5　本研究で用いる用語について

本研究で用いる用語に関し、次の２点について確認しておく。

まず、「左手書字」と「左利き」とを同義とする捉え方もあるが、本論文では「左手書字」に統一する。それは、偏側性（ラテラリティ）を意識するためである。本研究は硬筆書字に限定して考えるものであり、硬筆筆記具を用いる際に左手で書字する人を「左手書字者」とする。よって、例えば、箸は左手で扱うが、硬筆書字は右手の人は「右手書字者」となる。

次に、「書字教育」と「書写教育」の概念についてである。本研究は、左手書字者の「書字教育」について検討する。「書字教育」には、漢字教育などの文字の学習と、読みやすさや適切な速さ等をめざす書写教育の両方を含むものとする。ただし、左手書字のための適切な指導については、書写教育が中心となり、責任をもって対応すべきであると考えている。

2.　対象とした文献の概要

2.1　対象とした文献について

本研究で対象とした文献は England で出版された次の４冊である。これらの文献には、左手書字に関する具体的な指導法が著されている。

Ⅰ　Jean Alston（1996）：*Writing Left-handed　A guide for parents and teachers of left-handed children.* Manchester, UK：Dextral Books.

Ⅱ　Gwen Dornan（2007）：*Writing Left-handed…　…Write in, not left out.* The National Handwriting Association.

Ⅲ　Lauren Milson(2008)：*Your Left-handed Child　Making things easy for left-handers in a right-handed world.* London, UK：hamlyn.

Ⅳ　Julie Bennett（2015）：*HANDWRITING Pocketbook　A pocketful of tips, tools and techniques for teaching, improving and troubleshooting handwriting.* Hampshire, UK：Laurel House.

本研究においては、４文献ともに次に示す日本語訳された資料を用いた。訳そのも

のと、それぞれの文献の特徴については、Ⅰ Ⅱ Ⅳは、小林（2023）[14]、Ⅲは笹山（2009）[15] を参照願いたい。なお、研究において確認が必要な場合などには、原著を逐一確認した。なお、イギリスでは、National Curriculum（2013）[16] に non-statutory の欄ではあるが、左利きの児童への指導について記されている。

2.2　左手書字に関する記述の概要

対象とした 4 文献から、左手書字の特徴、具体的な指導内容や留意点等を全て抽出した。その結果、のべ 215 項目となった。

次に抽出した 215 項目を分類し、その概要を把握することとした。まず日本の書写教育における学習内容の項目を中心に、20 の分類を作成し、大分類とした。また、本研究の主旨に即して 47 の分類を作成し、小分類とした。なお、本稿では「横画」「横線」「横方向のストローク」について、その形状をいう場合、「横画」と表現する。それぞれの分類と、項目数を表 1 に示す。

大分類による各項目数の上位は、「持ち方」（63 件）「姿勢」（54 件）「書字方向」（27 件）「点画動作」（24 件）「鏡文字」（13 件）となった。たとえば、「姿勢」では「左側に十分なスペースが必要である」などの項目を見ることができる。

さらに、小分類による各項目数の上位は、「順手・逆手」（21 件）「着座位置」（17 件）「鏡文字」（13 件）「書字方向」（12 件）「紙の位置」（11 件）「持ち方」（11 件）「筆圧」（11 件）「手の汚れ」（10 件）「押す動作」（9 件）「紙の傾き」（8 件）「視角」（8 件）となった。中でも、「順手・逆手」「着座位置」「手の汚れ」「押す動作」「紙の傾き」等は、日本の通常の書写指導においては触れられにくい項目であり、注目しておきたい。たとえば、「手の汚れ」という分類には、「書いた文字の上を手が通り、こすってしま」うという左手書字者の多くが感じる問題点と、それを解決するための方策としての「速乾性インクを使う」ことによる改善などが含まれる。また、3 件と少ないものの「字間」については、書いた文字を左手で隠してしまいがちであることへの配慮としてみることができる。

表 1
大分類・小分類とそれぞれの項目数

大分類		小分類	
姿勢	54	紙の位置	11
		紙の傾き	8
		紙の押さえ方	4
		姿勢	5
		着座位置	19
		机・イス	6
		右手位置	1
持ち方	63	筆圧	11
		握圧	3
		腕の位置	1
		視角	8
		順手逆手	22
		接触位置	2
		筆記具角度	1
		持ち方	11
		持ち方用具	4
筆記具	7	筆記具	7
用具	2	用具	2
点画動作	24	点画動作学習	2
		押す動作	9
		回転方向	6
		教材	1
		点画傾き	2
		横画方向	4
動作	2	腕	1
		動作	1
筆順	1	筆順	1
字形	1	読みにくい	1
鏡文字	13	鏡文字	13
書字方向	27	書字方向学習	3
		視覚	2
		書字方向	12
		手の汚れ	10
配列	3	字間	3
環境	3	照明	2
		机上	1
疲労	2	手・首・背中	1
		手・腕	1
教員資質	1	教員資質	1
指導方法	2	指導方法	2
学習方法	1	練習帳	1
学習意欲	1	学習意欲	1
学習効果	1	学習効果	1
その他	5	書字速度	2
		書字手選択	1
		その他	2
総合	2	総合	2

3. 対象とした文献における項目と基礎的考察

3.1 検討の手順

本章では、日本語における左手書字の学習指導の改善について探るための前段階として、基礎的考察をおこなう。そのために、215 項目を３段階に分けて検討することが効果的だと考えた。まず、項目の中には、「利き手に関わらず配慮すべき項目」が含まれており、いったんこれらを選別した。左手書字者のみでなく右手書字者にも同様に重要な事項である。しかし、左手書字者にとってより重要であることも考え得るため、この項目についても考察をおこなう。次に、残る項目について次の二つに分け、それぞれについて考察をおこなう。

・「単なる左右の対称性に起因する項目」（着座位置や採光等）
・「文字体系や書字動作に起因する項目」（「横画は左から右」等）

3.2 利き手に関わらず配慮すべき項目

「利き手に関わらず配慮すべき項目」と判断した項目はのべ 78 項目あり、その例を表 2 に示した。大分類で示すと「持ち方」「姿勢」「書字方向」「点画動作」「鏡文字」が多くを占める。たとえば大分類「姿勢」に関しては、「机と椅子が適切な高さであること」「適した紙の置き方をする」などのように、利き手に関わらず重要であるが、左手書字者にとって特に重要だとしてあげられていると推測できる。

「そのまま改善に用いることのできる例」にあげた項目、たとえば「机などを身長に合わせる」などは、左手書字者・右手書字者、いずれにも重要な事項であり、さらに検証を必要とすることもないことから、そのまま改善に用いることができると考えた。また「学習意欲」に分類した「多くの誉め言葉をかける」といった項目は、左手書字者が書字に自信を失いがちな傾向を背景にした配慮といえよう。

一方、いくつかの課題が明らかになる。たとえば、望ましい持ち方をすべきであるというのは、利き手に関わらず重要だと考えられるが、その望ましい持ち方が左手書字者と右手書字者とで同一であるかは、別である。また、用いやすい筆記具を選ぶべきであるとしているが、左手書字と右手書字とで、また書字

表 2　利き手に関わらず配慮すべき項目の例

■そのまま改善に用いることのできる例

［大区分］	［小区分］	［文献での具体的な記述］
姿勢	机・イス	机などを身長に合わせる
姿勢	着座位置	正しい姿勢・楽な姿勢で座る
学習意欲	学習意欲	多くの誉め言葉をかける

■研究と議論が必要な例

持ち方	持ち方	効率のよい持ち方
持ち方	持ち方	「３点支持」の持ち方にする
持ち方	筆記具	左利き用万年筆を用いる

■基礎研究結果との照合が望まれる例

持ち方	筆圧	筆圧が強い傾向がある

■日本における調査が必要な例

書字方向	書字方向	書き始めの場所と方向を示す
鏡文字	鏡文字	鏡文字にならないような学習

■教材化において差が生じる可能性がある例

点画動作	教材	同じ方向のストロークごとに学習

する文字種の違い等から、その筆記具の特徴は同一として良いだろうか。これらは、3.4において再度検討する。

左手書字者は「筆圧が強い傾向がある」という項目がある。日本における基礎研究では、ストロークの方向により筆圧が異なる傾向を示すことが紹介されている[8]が、単に左手書字者は筆圧が高い傾向にあるといったことは示されておらず、そのため「基礎研究結果との照合が望まれる例」とした。さらに、イギリスでは左手書字者に書字方向の間違いが多いことと、鏡文字が多いということを背景にした項目があるが、日本語書字においても左手書字者に同様の傾向が見られるかはあきらかでないため、「日本における調査が必要な例」とした。

「教材化において差が生じる可能性がある例」に、「同じ方向のストロークごとに学習する」という項目があり、これはいわゆる「ノメクタ」式のように、類似する動作ごとに学習することの効果を示したものである。そのこと自体に左手書字者と右手書字者とで異なることはないが、特に繰り返し練習すべき動作（点画・ストローク）が異なる可能性がある。

以上の例から、「利き手に関わらず配慮すべき項目」においても、今後の課題となる項目や次章において再度検討すべき点があることを押さえておきたい。

3.3　単なる左右の対称性に起因する項目

説明文等において「左」と「右」を置き換えると、そのまま成立する、または図において左右反転させると基本的に成立する項目を、「単なる左右の対称性に起因する項目」とした。「単なる左右の対称性に起因する項目」と判断した項目は15項目あり、大分類では多くが「姿勢」であり、小分類では「着座位置」「紙の位置」「紙の押さえ方」「筆記具・用具」となる。大分類「環境」の「照明」も、ここに位置づけられる。これらのうち、主たる項目を表3に示した。

イギリスの文献における、「肩のほとんど、腕、手の動きのほとんどが体の中心線より左側」といった項目は、右手

表 3　単なる左右の対称性に起因する項目

■当然であっても意識されている例

［大区分］	［小区分］	［文献での具体的な記述］
姿勢	紙の位置	動きはほとんど身体の中心線より左側で起こる（以下、略）
姿勢	姿勢	肩のほとんど、腕、手の動きのほとんどが体の中心線より左側

■表現・図示等における配慮

姿勢	紙の位置	紙の位置を体の中央より左側におく
姿勢	着座位置	左側に十分なスペースが必要である
姿勢	紙の押さえ方	書く方の手の邪魔にならないように置く

※手本と練習欄の位置関係の記述はない（横書きのため）

■環境の配慮

姿勢	着座位置	左利きの人の隣または右利きの人の左に座る・同じ利き手の生徒と一緒に座らせる
環境	照明	体の一部が影にならないように正しい照明になっている

■用具について

筆記具	筆記具	左利き用の万年筆・ローラーボール
筆記具	筆記具	オフセットされたペン先
筆記具	筆記具	擦れないフェルトペン

書字者であれば、「右」に置き換えるだけで成立する。イギリスの文献には、このように、当然と考えられる内容も具体的に記されている。

3.3.1　表現・図示等における配慮

「表現･図示等における配慮」とした項目に、「紙の位置を体の中央より左側におく」「左側に十分なスペースが必要である」がある。これらも、右手書字者の場合は、「右側」とすれば成立する項目である。日本の教材は、右手書字者向けの表現がなされているという指摘があることから、右手書字者向けの表現・左手書字者向けの表現という配慮をおこなう必要がある箇所と考えられる。さらに、紙の押さえ方に関して「書く方の手の邪魔にならないように置く」という表現が用いられている箇所があり、「書く方の手」という表現を用いることで、左右どちらの手による書字にも対応できる表現としている。すなわち指示の文言は、極力、利き手に関係しない表現にすべきだと考えられる。また、参考の写真は、極力、左手書字者と右手書字者の両方を掲載する等といった配慮が必要である。このような配慮は、教科書や教材、その他の資料において、左手書字の子供たちが混乱しないようにするための配慮となる。

なお日本においては、縦書きの場合、練習欄の左側に手本（参考例）を示すことがあり、左手書字者は手で隠すことになってしまうため、学習が難しくなる。この点は、イギリスにおける横書きでは問題にならないことだが、日本において練習帳などを作成する際に配慮すべきことであるため、※として付記した。

以上については、５章において、「そのまま改善に用いる可能性があること」としてまとめて示すこととする。

3.3.2　環境の配慮

「環境の配慮」とした項目に､左手書字の児童は「右利きの子どもの左隣に座る」､「同じ利き手の生徒と一緒に座らせる」といった着座位置に関する項目や、「体の一部が影にならないように正しい照明になっている」といった照明に関する項目がある。着座位置や照明などの環境に関する配慮は、教室で先生方に配慮してもらうべき事項だと考える。

以上についても、５章において、「そのまま改善に用いる可能性があること」としてまとめて示すこととする。

3.3.3　用具について

また、「用具」に関する項目が複数見られた。左利き用の万年筆・ローラーボール＝ボールペン・フェルトペン、オフセットされたペン先といった表現が見られ、これらからは、利き手に応じた筆記具の工夫の可能性が見てとれる。しかし、左手書字者向けの筆記具はどうあるべきか、といったことが課題となる。また、イギリスの文献において「左手書字者用の鉛筆」というものが出てこない点も留意すべきであろう。どういった課題の解決のために、左手書字者用の筆記具が必要とされるのかということも含め、左手書字者のための筆記具については 4.3 において検討する。

以上より、「単なる左右の対称性に起因する項目」には、「そのまま改善に用いる可能性があること」が多く見られ、教科書や教材また教室における配慮に生かせるだろう。

3.4　文字体系や書字動作に起因する項目

字体の正しさや、字形の望ましさ、点画を書字する際の向き、筆順などに起因すると考えられる項目を、「文字体系や書字動作に起因する項目」とした。たとえば、横書きの際には文字を左から右に配列するといった、イギリスと日本とで共通する書字方向の特徴や、アルファベットでは縦方向のストロークの傾き、漢字では横画を右上がりに書くといった関連する特徴が見られる。

これらに起因すると判断した項目は95項目あり、小分類で示すと「点画傾き（縦方向のストロークの傾斜）」「書字方向」「鏡文字」、「横画方向」「回転方向」「押す動作」「筆圧」、そして「手が汚れる問題」「順手・逆手」「紙の傾け方」が該当する。これらの項目に対し、

・どういった問題が生じているか、

・それらをどのように解決しようとしているか

という視点で検討することで、日本の左手書字者への指導の改善について考える基礎とする。まず、どういった問題が生じているかという点に関して、その実態についての項目を表4に示した。日本とイギリスとで「同様に考えられる実態」と「角度や見方を変えれば同様に考えられる実態」、「把握の必要がある実態」とに分けた。「把握の必要がある実態」は、書字方向と鏡文字に関するものであり既に述べたとおりである。

「書いた文字の上を手が通り、こすってしまう」ために手や紙が汚れるという問題は、イギリスと日本（横書きでは）ともに生じることといえる。また、イギリスにおける縦方向のストロークの傾きと日本における横画の右上がりとを対応させることで、角度という点で似た考察ができるものもある。一方、イギリスにおける横方向のストロークと、日本における横画については、そのストロークの方向という点で、同様の考察ができる可能性があるものの、その書字習慣から同一の解決方法として良いかどうか、十分な検討が必要であると考えられる。

その上で、表4からその問題点を整理すると、次の5点にまとめることができるだろう。

表 4　文字体系や書字動作に起因する実態

■同様に考えられる実態

［大分類］	［小分類］	［文献での具体的な記述］
点画動作	押す動作	ストロークの方向的に押す動作になりがち
点画動作	押す動作	鉛筆は紙を突き刺したり破いたり
書字方向	手の汚れ	書いた文字の上を手が通り、こすってしまう
持ち方	順手逆手	手を巻き込むような持ち方
点画動作	回転方向	丸を時計回りに書くため～丸い文字は難しい
姿勢	紙の傾き	紙を時計回りに傾ける
点画動作	横画方向	横方向のストロークの方向、左右を逆にする

■角度や見方を変えれば、同様に考えられる実態

点画動作	点画傾き	（縦線が）　／　が　＼　の傾向になる

■把握の必要がある実態

持ち方	筆圧	筆圧が強い傾向がある
書字方向	書字方向	文字を右から左に書く傾向がある
鏡文字	鏡文字	鏡文字が多い傾向がある

・点画・線の傾き（点画の書き方・字形）
・横画の押す動作（点画の書き方）
・手を巻き込むような持ち方・逆手（筆記具の持ち方）
・手が汚れること（書字方向）
・回転の動作（筆順）

これらの内、「手が汚れること（書字方向）」「回転の動作（筆順）」を除く３点について、イギリスではどのように解決しようとしているのかを確認していく。

3.4.1　点画・線の傾きの問題と解決方法

イギリスの文献では、縦方向のストロークが、典型である「／　右傾斜」ではなく、左手書字者の場合は「＼　左傾斜」となる傾向が指摘されている。その解決方法については、表５のように、次の２点が述べられている。

表 5　文字体系や書字動作に起因する問題の改善 1

■点画の傾きの問題と改善方法

［大分類］　［小分類］　［文献での具体的な記述］

点画動作　点画傾き　（縦線が）　／　が　＼　の傾向になる

↓

解決方法

↓

点画動作　点画傾き　読みやすければ｜でよい。
／でなくてよい。

Handwriting ⇔ Handwriting

姿勢　紙の傾き　紙を時計回りに傾ける

↓

日本への適用の可能性

↓

横画が、水平もしくは右下がりになっても良いか。（議論）
紙を傾けることで問題が生じないか。（研究）

a）右傾斜しなくてもよいという考え方
「読みやすければ｜でよい。／でなくてよい。」

b）紙を傾けることによる改善
「紙を時計回りに傾ける」ことによって適切な傾きにすること

日本に当てはめると、次のようになる。

A）横画が右上がりでなくてもよいという考え方。

B）紙を傾けることによる改善 (右上がりに書きやすい)

しかし、このようにした際には、次の課題が生じ、議論（α）と研究（β）のいずれか、もしくはその両方が必要になる。

α）横画が、水平もしくは右下がりになっても良いか（議論）

β）紙を傾けて書く（練習する）際に、問題が生じることはないか。（研究）

3.4.2　横画の押す動作の問題と解決方法

次に、「点画動作」の「ストロークが押す動作になりがち」、「鉛筆は紙を突き刺したり破いたり」しがち、また、「持ち方」の、「筆圧が強い傾向がある」という問題について、表６に示す。この問題は、横方向のストロークを、左から右に書くことによって生じる。イギリスでは、解決方法の一つとして、横方向のストロークを「右から左に書」くという解決方法が示されている。これを日本に当てはめようとした場合、「横画を右から左に書いて良いか」といった課題が生じ、議論あるいは研究が必要となる。

表６　文字体系や書字動作に起因する問題の改善２

■横画の押す動作の問題と改善方法

点画動作　押す動作　ストロークの方向的に押す動作になりがち

点画動作　押す動作　鉛筆は紙を突き刺したり破いたり

持ち方　筆圧　筆圧が強い傾向がある

↓

解決方法

↓

点画動作　横画方向　水平な線～右から左に書く

↓

日本への適用の可能性

↓

点画の書き方、横画のストロークの方向を変えて良いか?（議論・研究）

3.4.3　逆手（手を巻き込むような持ち方）と解決方法

続いて、「持ち方」の逆手（手を巻き込むような持ち方）の問題について、表７に示した。イギリスの文献では、解決方法として、「前腕はノートの端と平行」とし、「手首をまっすぐにして」、筆記具の先を長めに「先端から２cm 離して持」ち、そのかわりに、「紙を傾ける」ということが示されている。この解決方法は、筆記具の先を長めにして持つということ以外、左手書字者における望ましい持ち方が、右手書字者における望ましい持ち方と同様であると理解できる。3.2 において「望ましい持ち方」が左手書字者と右手書字者とで同一と考えて良いかということを述べた。これは先の問い、左手書字と右手書字とで望ましい持ち方は同じで良いのかという課題に対する、イギリスの文献における回答とみることもできる。

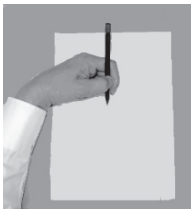
この方法を日本へ適用した場合、次の６点の効果が考えられる。

・横画を右上がりに書きやすい
・横画の押す動作の改善
・横画で突き刺したりせずにすむ
・横画方向の筆圧の改善（可能性）
・巻き込むような持ち方の改善
・書いた文字をこすらずにすむ

先の問題点とその解決方法であった、横画を逆方向に書くという対応も必要なくなり、「手が汚れる」という問題も解決される可能性がある。ただし、この中の、「紙を傾ける」という解決方法は、押木ら(2003)[17]が指摘するように、「紙を傾けた場合、字形への影響も予測でき」、日本の左手書字の改善として適切であるか、研究および議論が必要となる。

表 7　文字体系や書字動作に起因する問題の改善３

■逆手（手を巻き込むような持ち方）と改善方法



持ち方　順手逆手　手を巻き込むような持ち方

↓

解決方法

↓

持ち方　順手逆手　前腕はノートの端と平行
持ち方　順手逆手　手首をまっすぐにして～くずさない
持ち方　視角　先端から２㎝離して持つ。
姿勢　紙の傾き　紙を時計周りに傾ける

↓

日本への適用の可能性

↓

横画を右上がりに書きやすい
横画の押す動作の改善
横画で突き刺したりせずにすむ
横画方向の筆圧の改善（可能性）
巻き込むような持ち方の改善
書いた文字をこすらずにすむ

紙を傾けて良いのか[17]（研究）

4.　日本の左手書字指導への適用の可能性と課題

本章では、ここまでの検討結果を踏まえ、日本の左手書字指導の改善の可能性と課題に関して考察する。日本の左手書字指導の改善を考える場合、

・イギリスの書字と、日本の書字の差
・日本の書写教育での優先事項
・日本の教育研究・基礎研究の成果の援用

について、検討する必要がある。

ポイントは次に挙げる４点と、その他であると考えた。

○規定や学習内容の変更をおこなう可能性（議論）
○紙を傾けることは効果的か（研究）
○逆手による持ち方を否定すべきか（研究・議論）
○左手書字者用筆記具について（議論・研究）
○その他
　・縦書き書字・右回りの回転動作の問題など（研究）

4.1　規定や学習内容の変更をおこなう可能性

イギリスの場合、横方向のストロークを右から左に書くといった右手書字における習慣を変えようとする、解決策が示されていた。これを日本において考える際には、次のような事柄の変更の可否を議論する必要があるだろう。

※字体

※書字方向（左横書き）

・筆順

・点画の書き方（横画は左から右など）

・字形（横画の右上がりなど）

字体は「常用漢字表」(2010)[18] により規定され、左横書きについては、「公用文作成の考え方」(2022)[19] により、規定されている。「字体」や「書字方向」は、利き手がどうあれ、「必ず守る必要がある」ものである。一方、「議論の可能性がある」ものとして、「筆順」や横画の向き（例:横画を右から左に書く）などの「点画の書き方」、そして、横画の右上がりなどの「字形」が挙げられる。これらを変えることで、改善できる可能性のある課題があることは事実であろう。一方、そこまで踏み込んで考えるべきかどうかということについては、議論が必要だと考える。点画の書き方や字形の指導において、左手書字者と右手書字者とで異なる内容となる可能性があるからである。

特に筆順に関しては、先に紹介した内山（2013)[10] による左手書字者のための筆順の提案がある。内山(2013)[10] は日本語学習者に留めた論であり、日本語を母語として学ぶものにまで適用するとなると、かなりの議論を要する可能性がある。ただし、図１左に示すように、大西・押木（2015)[8] は、回転の動作と筆順の選択等について、左手書字者にとって書きやすい回転動作が、一般に用いられている筆順と異なる可能性を示している。そのことから、筆順指導の実際の場面における、筆順指導の厳密さや学習結果の評価について検討することは現実的にあり得るかも知れない。左手書字者には、ある部分の筆順について、『筆順指導の手びき』[20] における「筆順の原則」を厳密に適用しないといったことである。またそのことが、3.4 において保留していた「右回りの回転の動作」の問題の解消につながる可能性がある。

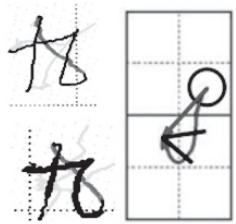


図　1　左手書字者の空中での動作[8]と筆順・縦書きのオーバーシュート[9]

4.2　紙を傾ける方法と逆手の問題

「縦方向のストロークの角度の問題（日本語書字では横画の角度の問題)」「横画が押す動作になる」「書いた文字をこすってしまう」という左手書字者にとっての複数の課題に対し、イギリスの場合、「紙を傾けること」によって、解決を図ろうとしていることを前章において示した。これを改めてまとめ直すと、図２の右上のようになる。アルファベットは、字体・字形の特徴から、文字が傾いていても字形の認識が比

較的容易であるのに対し、漢字・ひらがな・カタカナは、傾くと、字体や字形の認識が難しくなるため、傾けない方が学習上効果的ではないかという考え方ができる。

改めて考えたとき、イギリスにおける、紙を傾けるなどの方法は、逆手による持ち方を改善しようとするものであった。したがって、紙を傾ける方法は、逆手による持ち方と関係が強い可能性がある。すなわち、紙を傾けることも、逆手による持ち方も、いずれも「右上がりにしやすい」「押す動作の軽減」「書いた文字をこすりにくい」といったことが期待できる。逆手にすることによって、改善の可能性が考えられる一方、デメリットもあり得る。そのため、「紙の傾き」と「逆手」のどちらを改善策とすべきか、あるいはどちらも改善策とすべきではないのかといった検討が必要である。この点は、特にイギリスの文献と日本の書写教育の検討という本研究における考察結果として重要な点である。

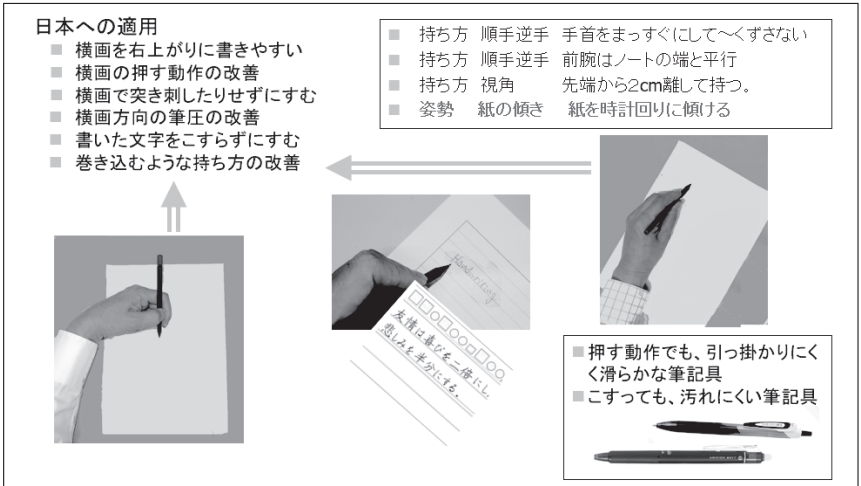


図 2 紙を傾ける方法と逆手の問題（筆記具による対処）

4.3 左手書字者用筆記具などについて

また、横画の押す動作や、書いた文字をこすってしまうという問題には、筆記具による改善が考えられる。尖った鉛筆などと異なり、

・押す動作でもなめらかに書ける筆記具

・こすっても汚れにくい筆記具の使用

などがそれにあたる。具体的には、なめらかな書き味や、速乾性インクのボールペン、消せるボールペンの使用などが考えられる。小学校では、児童の筆記具が鉛筆に限定されているという現状があるが、学習者の特性にあった筆記具の選択を考えても良い段階に来ているとはいえないだろうか。左手書字者・右手書字者ともに書きやすい筆記具、すなわちユニバーサルデザイン的な筆記具という発想と、左手書字者にとって書きやすい筆記具という発想の両面から考えてはどうだろうか。

その他、日本への適用のために考察すべき内容としては、イギリスが横書きに限られるのに対して、「縦書き書字問題」[5]がある。これらについては、図１の右の図に示すような、縦書き書字と利き手についての先行研究[9]と対照しながら検討していくべき課題であると考える。

5. 成果と今後

左手書字指導の改善の可能性とそのための課題を明らかにするとともに、課題を解決するための議論や研究すべき点を明らかにすることを目的としてきた。本研究の成果については、どのような改善すべき点があるかという点を省略すると、次のようにまとめられる。

○ そのまま改善に用いる可能性があること
- ➢ 教科書・教材、その他の資料における配慮
  - ✧ 指示の文言
  - ✧ 参考の写真
  - ✧ 手本と練習欄の位置関係
- ➢ 教室における配慮
  - ✧ 着座位置
  - ✧ 採光の配慮

○ 議論が必要なこと（配慮あるいは評価の許容のために）
- ➢ 特性に応じた筆記具の教室での使用について
- ➢ 左手書字者のための筆順（右回りの動作に関わる部分等）の対応について
- ➢ 左手書字者のための「点画の書き方」（横方向のストロークの向き等）の対応について
- ➢ 左手書字者のための字形（横画の右上がり等）の対応について

○ 研究や調査が必要なこと（指導の工夫のために）
- ➢ 筆記具の持ち方および姿勢等に関すること
  - ✧ 紙を傾けることによる対応の効果と問題点
  - ✧ 逆手による対応の効果と問題点
  - ✧ 左手書字者の筆記具の持ち方と姿勢、特に首の傾きなど
- ➢ 左手書字者用のための筆順等に関すること
  - ✧ 縦書き問題・回転の動作・筆順
- ➢ 書字方向や鏡文字の実態

まず「すぐに生かせる可能性があること」として示した内容は、文字通り、本研究の成果として、そのまま生かすことができる部分として考えられる。これらは、主として「単なる左右の対称性に起因する項目」として検討した内容である。

一方、「文字体系や書字動作に起因する項目」は、議論や基礎研究をおこなう必要がある。特に、日本語書字でいえば「横画の右上がりなど角度の問題」「横画が押す動作になる」「書いた文字をこすってしまう」といった改善すべき点に対し、それら

への配慮もしくは評価の許容を議論すべきか、何らかの指導の工夫で対応すべきか、ということが問題となる。指導の工夫としては、「紙を傾けることによる対応」が果たして日本語書字において適切であるか、またイギリスで否定されている「逆手による対応」を日本において否定して良いのかという点が明らかになった。これらについては、特性に応じた筆記具の問題とともに、議論・研究すべき喫緊の課題であると考える。そのための研究としては、日本の書写教育における学習内容を再度確認・検討することも重要である。たとえば、持ち方と姿勢は関係している[17]とされており、その点から左手書字者の筆記具の持ち方と姿勢、特に首の傾きなどについての研究も課題となる。

また、イギリスにおいて左手書字者に多く見られるとされていた、鏡文字や文字を右から左に書く傾向があるといった点は、日本において確認しておくべき点と言えよう。そして、紙を傾けることによる対応・逆手による対応では解決できない可能性がある点として、縦書き書字に関する問題や回転方向と筆順の問題がある。基礎研究や、筆順指導の厳密さについての議論が有効だと考える。

なお本研究では、イギリスの文献における実践的な内容を検討してきた。今回参照したような文献は日本において見られないものの、教室においては個々の教師が工夫して、左手書字者のために配慮している可能性はある。そのことを確認するような研究の方向性もある。

他国の実践、日本の基礎研究や教室における工夫などを総合するとともに、課題の議論・研究により、左手書字の児童が、気持ちよく文字を書き、学習できるよう、課題を解決していくことが望まれる。本研究もそのために役立つことを期待したい。

謝辞　本研究は JSPS 科研費 JP21K02488 の助成を受けたものである。

---

1 小林比出代（2006），左利き者の望ましい硬筆筆記具の持ち方に関する文献的考察，書写書道教育研究 20 号，pp.30-40.

2 篠原久枝・鈴木友梨（2021），利き手の教育に関する一考察，宮崎大学教育学部紀要 97 号，pp.169-186

3 なかのまき（2008），左手書字をめぐる問題，社会言語学⑻，pp.61-76.

4 なかのまき・松本仁志（2012），書評『書くことの学びを支える国語科書写の展開』，社会言語学（12），pp.115-137.

5 清水文博（2013），テーブル 3　書写・書道の学習者論　学習者の立場から考えていかなければならないことは何か，書写書道教育研究 27 号，p.118

6 塩苅有紀（1997），左手利きの児童・生徒に対する書写指導について，信大国語教育 7，pp.55-64.

7 尾崎雄二郎（1977），文字と左利き　架空講演，展望 219・3，pp.136-148.

8 大西愛･押木秀樹（2015），書字等の動作における利き手の差に関する基礎的研究―ストロークの向き・傾きと空筆部の選択を中心に―，上越教育大学国語研究 29 号，pp.34-48.

9 押木秀樹・遠藤奈帆・平田真理子（2020），文字間の空筆部にみられる動作と利き手を中心とする条件，上越教育大学国語研究 34 号，pp.68-51.
10 内山和也（2013），左利き日本語学習者への漢字指導に関する小考―左手書字専用筆順の提案―，別府大学日本語教育研究　No. 3，pp.23-30.
11 杉﨑哲子（2015），左手書字における持ち方と書き進め方との相関性，書写書道教育研究 30 号，pp.11-20.
12 鈴木貴子・元井修・川間健之介（2012），左利き者の書字動作の分析：右利き者との比較，作業療法　31 (6)，pp.550-563
13 市ノ瀬有香・押木秀樹（2022），硬筆を左手で扱う学習者が毛筆による書写の学習を効果的に行うための研究―ラテラリティ・等価性・転移の理論と毛筆の特性から―，書写書道教育研究 36 号，pp.11-20.
14 小林比出代（2020），左利き者の書字教育に関する研究，広島大学大学院教育学研究科（博士課程後期）学位論文
15 ローレン・ミルソム著　笹山裕子訳（2009），左利きの子　右手社会で暮らしやすくするために，東京書籍
16 Department for Education（2013），The national curriculum in England Key stages 1 and 2 framework document，GOV.UK
17 押木秀樹・近藤聖子・橋本愛（2003），望ましい筆記具の持ち方とその合理性および検証方法について，書写書道教育研究 17 号，pp.11-20.
18 文化庁（2010），常用漢字表
19 文化庁（2022），公用文作成の考え方
20 文部省初等中等教育局（1958），筆順指導の手びき，博文堂出版

（ i 上越教育大学　ii 松本市立波田小学校 2021 年度修了　iii 信州大学 ）